

## 令和3年度 学長戦略経費（公募型プロジェクト）研究成果概要報告書

経費の種類	<input checked="" type="checkbox"/> 共同研究推進経費 <input type="checkbox"/> 若手教員研究支援経費
プロジェクトの名称	スラックラインの学習における「ほう助用具」の使用に関する研究
報告者氏名・所属・職名	越川 茂樹・釧路校・教授
プロジェクト担当者氏名・所属・職名	山本 悟・釧路校・准教授 中村 謙太・附属釧路義務教育学校前期課程・教諭 森 博隆・北海道教育大学大学院・大学院生 國行 海斗・北海道教育大学教職大学院・大学院生 桐島小百合・北海道教育大学釧路校・学部生
研究内容及び成果の概要	<p>スラックラインは、一本のライン上で、様々なパフォーマンスとしての“わざ”を楽しむ運動である。スラックラインに関する国内外の文献をみても、練習方法に関する詳細な記述は少ない。現状では、一部の者たちの、卓越性の追求によって、“わざ”の発展がなされ、そして、共同体の中で、その暗黙的な知が動感身体（金子，2005a，p.197）を介して伝わりをみせる、という様相を示している。そのため、実施者の学習過程の実相は、個人の動感世界（金子，2005b，p.118）の中で生じ、完結してしまう可能性が高いため、なかなか学習に関する有益な情報を抽出することが難しいのが現状である。</p> <p>初心者の実践では、一本のライン上を「歩く」という“わざ”の習得を志向しても「やってみただけ難しかった」と思い、その習得を断念することは珍しいことではない。こうした、問題を解決する学習の手立てとして「補助用具」（村山ら，2008，pp.72-73；以下，ほう助用具）の使用が考えられる。本研究では，ほう助用具として「リードロープ」（Geyer，Dら，2011）を使用した，初心者の「歩く」という“わざ”の習得プロセスを発生論的運動学（金子，2002，pp.27-36）の観点から分析した。</p> <p>その結果，対象とした5名の初心者の女子大学生は，5日間（1回1時間）の実践の中で「歩く」という“わざ”を習得した。その習得プロセスにおける「借間」（金子，2002，p.524）分析から，実施者とほう助用具の意味関係が明らかとなった。その結果は，以下の通りである。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1) リードロープの使用がライン上を「歩く」という“わざ”の全体経過の体験を可能にしたこと</li> <li>2) リードロープあり→なし，ではなく，両者を行き来しながら，実施者は“コツ”を探し求めたこと</li> <li>3) 上記2)から，リードロープが初心者にとって“コツ”を探るためのツールとなったこと</li> <li>4) 習熟プロセスの中で，リードロープの使用が“やりにくさ”を感じさせる，ほう助用具の邪魔化が生じたこと</li> </ol> <p>このように，本研究によって，実施者とほう助用具との意味関係が開示することができた。この意味関係の開示は，初心者にはただリードロープを使用すればよいのではないか，という漠然とした理解を，実践現場に還元するための情報へと引き上げる可能性を秘めている。今後は，様々な年齢やレディネスを異なる学習者に対する実践や，他の“わざ”についてどう影響するかについての実践研究を行うことによって，スラックラインの指導方法論を充実させていきたい。</p>
成果の公表の状況	<p>【著書】</p> <p>【学術論文】</p>
教育現場で活用可能な分野・教材等	<p>体育・保健体育において，スラックラインを導入する場合の資料となる。設置方法などの詳細は，桐島小百合（2022）スラックラインの習得における補助用具の使用に関する発生運動学的研究-初心者を対象とした「歩く」の実践分析-，北海道教育大学釧路校卒業論文（北海道教育大学釧路校保健体育研究室所蔵）を参照されたい。</p>
配布又はダウンロード可能な資料	桐島小百合（2022）スラックラインの習得における補助用具の使用に関する発生運動学的研究-初心者を対象とした「歩く」の実践分析-，北海道教育大学釧路校卒業論文，北海道教育大学釧路校保健体育研究室所蔵。
問い合わせ先	代表者：越川 茂樹 電話：0154-44-3312 FAX：0154-44-3312 mail：koshikawa.shigeki@k.hokkyodai.ac.jp